

旧約聖書 アモス書 5章 4節－9節

新約聖書 使徒言行録 2章 29節－36節

選句「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」(36)。

- 1、今日の聖書の箇所は「ペトロの説教（実は著者）」の中間部である。この説教の特質は、「神」が主語であること（前回の趣旨）で、復活について「イエスが甦った」ではなく「神がイエスを甦えらされた」という理解をする。ここにルカ文書独特な「救済史観」がある。今日のところも「イエスを主とし、また、メシアとなさった」という言い方をする。実は「イエスはメシア（キリスト、油注がれた者）である」と「イエスは主（キュリオス）である」という定式は、原始教会ではそれぞれ根拠が異なり、曲折を経て定着した特徴のある二つの信条文である。「主」と「メシア」を軽々並べられる様なものではない。しかし、著者ルカが敢えて併記するのは、その差異よりも、あなたがたは「殺す側」の価値観に立っているが、神は「生かす側」の価値観だという大前提の宣言をしているからである。
- 2、イエスはローマ帝国支配者にもユダヤ当局者にも不都合な存在であったので殺された。福音書の記事はローマ帝国に対する護教的な姿勢で書かれているので、ここではユダヤ人の「犯罪性」だけがと取り上げられている。神が下す審判の火と結び付いて、虐げられたものの側からイエスの憤りが、ローマ帝国・ユダヤ教体制批判であった。それは根源的に「生かす側」の価値観であった。
- 3、「戦争による国土の破壊、農業の荒廃、難民の増大。戦争と占領が平和をもたらさないことは当たり前のことだ。昨年8月、アフガニスタンでの農業支援活動に献身していたペシャワール会の伊藤和也さんが殺害されるという悲劇が起こった。しかしペシャワール会の現地代表中村哲さんはアフガニスタン現地で活動を継続し、確実に大きな成果をあげている。中村さんたちの活動でよみがえった耕作地は、「平和への希望」をともしている。World Peace Now は9月19日（土）に「武力で平和はつくれぬ アフガニスタンに緑と生命を」と題して「ペシャワール会現地報告会」を開催する。・・・中村哲さん（あるいは福元満治事務局長）が講演する。」（『反改憲運動通信』2009/9/2）。ここには「殺されても」「武力ではなく」「信義、愛」によって命がもたらされるという価値感がある。どちらの価値観に立つか、複雑な現代の問題は、根源で鮮明な価値観の選択を迫られている。
- 4、「信条文」は、ある状況で「殺す側」にたいして「そうではない」ことを表明している。その文言は、状況的意味を持っている。原始教団では「キュリオス・イエズス（イエスは主なり）」は、ローマの「キュリオス・カエサル（皇帝は主なり）」との対抗で意味を持った。そもには迫害の危険があった。もちろん現在のイエスにたいする「歓呼と宣言」でもあったことは事実である。現代のクリスチャンは「主」という表現をよく使う。手紙の冒頭に「栄光在主」、終わりに「主にありて」など記す。だが、それが闘いの言葉であったことを忘れまい。